

集

俳句フォーラム

2021年7月 第80号



拳 重原爽美

この頃の頼りは炬燵蹲る
春の音連れて小川のせせらぐや
露の臺土の中から拳上げ
片栗の花の乱舞に踏み場無く
芹摘んで濁りし水のすぐ澄める

初富士 石川東児

日記書く指がこわばる寒灯火
初富士や風一天に透き徹る
梅見会人目気にしつマスクとる
余命てふ得体なきもの二月尽
富士に向かう電車菜の花分けて行く

初夢 仁上博恵

初夢は秀句湧き出て醒めにけり
メールてふ時代先駆け初句会
早春の花舗さまざまな色踊る
春立つ日ひと日厨を磨き上げ
千枚田の挿絵が誘う春の風

願う 若泉真樹

散り尽くす木の葉未来を信じつつ
転変の世やささやかな藪柑子
生かされて生きるを願う初詣
端正な樹々暗流の冬の果て
発心てふはるけき旅や雪解して

気品 大山夏子

大年の空はやぶさの還る音
風強き大年歩幅確めて
息災を確む日課日脚伸ぶ
靴紐を結び直して春寒し
紅白梅変らぬ気品羨しかな

春へ

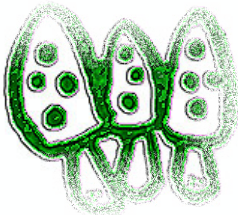
瀬戸美文

我が机転勤決まる年の暮れ
葉牡丹を植えて願えし良き年を
祖母思う飛驒高山の花餅や
春疾風五年日記の今日を記す
春光や日曜大工のトントン

野良猫の自由不自由

小笠原妙子

野良猫の自由不自由寒に入る
遠回りして蠟梅の風の中
内裏雛向合わせ見るあれかしや
シャガールの筆の遊泳春の夢
都バスへの一步は高し山笑ふ





佐保姫

渡辺節子

佐保姫の降臨鳥らさんざめく
日本人墓地で肩寄せ犬ふぐり
凍晴の夜は満天の星ならん
夕凍みて望郷の歌胸焦がす
山茶花の垣根の道は昭和なり

明日

大山夏子

屠蘇酌むや米寿に何を望むべく
除夜の鐘鳴らぬ寺町コロナ増ゆ
降る雪や都心音なく人消えて
虫出しの雷や車中に身をちぢめ
明日と言う未来に漕ぎしふらここを

春隣

中川のぼる

冬桜恋はかつ消えかつ結び
都々逸の戀の一つも春隣
明け染めて香り眩しき白梅の
春浅し自粛慣れしたわび住まい
沈丁花徐々に深みの香が満ちて

孫

江口九星

公園の山登る孫うららかに
三椏の花咲く明かり夕暮れて
白水仙月の光に浮遊して
補助輪がとれたと孫の大晦日
寒中に健気なるかな梅一輪

福寿草

伊藤昌枝

福寿草睦み合うこと訴えて
雪便りあれば望郷募りけり
子狐にも紅きべべ着せ初午や
明日葉のえぐみや想う伊豆の島
長堤や踊り子草の乱舞して

夜半の春

吉宇田麻衣

マスク越しお経が響くお堂かな
かじけ猫今日は勝手に膝の上
冬鷗吾れも生かさされ飛び立たん
堀つたう園児の散歩春日影
軒さえ安堵となりて夜半の春

月朧

楠本和弘

初日記愚直のままに五十年
消防士ロープで手繰る冬茜
橋の名に残る渡し場都鳥
月朧波の上なる溶鉦炬
指揮者気取りの禽白梅の枝移り

伊達巻

渡部恭子

節料理伊達巻の助手四歳児
金箔の揺れる年酒が喉通る
雑煮椀かしわ丸餅望郷の
蒼穹や明日も晴れてね石鹼玉
体幹を鍛錬中や春疾風

子パンダ

小澤えみ子

三日はや納豆出番待つている
待ち時間長き踏切寒に入る
子パンダのでんぐり返し春立つ日
種袋かさこそ夢の音弾む
釣銭が蒺藜草の束になる

へそ曲がり

酒井たかお

年酒手に焚火囲みて畑談義
ひらがなの希望溢れる年賀状
厨から巣立ちし蝶を見送りて
早朝の豆腐屋の軒桜草
喇叭水仙一人や二人はへそ曲がり

希望

由良則子

手探りの道に希望の初明り
体験の子の目生き生き麦を踏む
菜の花茹で一本はコップに挿す
うぐいすの独唱一節夜明けかな
銀輪で明日香を巡る木の芽風



春炬燵

平野無石

記憶より小さきふるさと山眠る
冴返る夜風歴史の忍者逝く
春の浜土産に迷う寺泊
ローマ史の地図を旅する春炬燵
軒先の無人販売春大根

桃の花

都築繁子

柚子湯して自肅の肩をほぐしけり
緊急事態宣言延長街二月
釣り糸の間自在に春の鴨
祭無きを知らずや梅の咲き満ちて
桃の花籠のゆるみし寿司の桶

木挽町

篠田純子

二の午の地口行灯木挽町
野良猫に銀次と名付け路地うらら
小休止じき大休止初仕事
銀座権八コロナ禍に閉づ冬樹の芽
胸ポケットに春の蜂来てしばし居り

春炬燵

田中藤穂

春満月美しとの電話二人より
皆うちへ来たがる理由春炬燵
野良猫の今日は通らず庭芽吹く
紅二輪しぼり三輪椿咲く
芭蕉にも父母恋う俳句雉の声

春隣

大山夏子

初富士や米寿を如何に生き抜かん
幼き頃住みし里山小正月
次つぎに身のどこか病む春隣
啓蟄や杖を小脇に足ならし
春の月ただようように上りけり